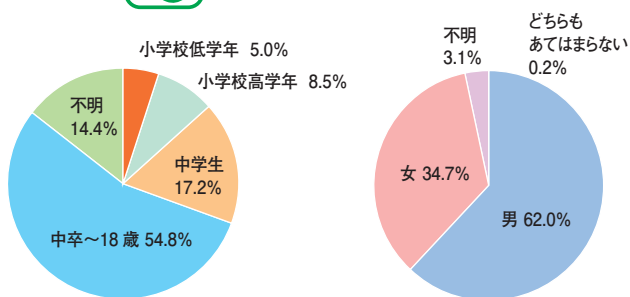


TEL : 045-342-0255 <https://www.yokohama-childline.com/>Autumn
2025 年秋号
No.3

2024 年度にチャイルドラインに寄せられた子どもからの電話



会話成立別の内訳



着信状況

すぐ切れた・無言・お試し
6,165会話成立
2,703

2024年4月1日～2025年3月31日までの1年間に、よこはまチャイルドラインが受けた子どもたちからの電話は8,868件(昨年度9,707件)でした。そのうち会話が成立したのは2,703件(昨年度2,588件)、会話不成立は6,165件(昨年度7,119件)でした。

《電話内容別の内訳》

内容	学校・フリースクール	部活	性	家庭	職場	ネットトラブル	地域	自分	不明	計
件数	636	51	602	299	7	20	42	1,046	6,165	8,868

《2024 年度オンラインチャットの内訳 ※2024 年 4 月より月 1 日開設》

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月
件数	3	5	0	1	8	5	4	5	4	4	0	0

子どもの声にならない声を受けとめる



チャイルドラインは、子どもの声を受けとめ寄り添う電話です。

よこはまチャイルドラインには、年間約8,868件のアクセスがあり、そのうち約2,703件は会話が成立しますが、約6,165件はすぐに切れてしまったり、無言だったり会話にならなかった電話です。

私たちは、子どもの声にならない声に対して「話ができるまで待てるよ」「つながってるからね」「言いたくないことは、言わなくてもいいよ」と声をかけながら、5～10分くらい待つようにしています。

心が傷ついている子どもは、気持ちを言葉にすることがむずかしいし、大人から何度も傷つけられているので、頼りたいけど傷つきたくない、という気持ちが行ったり来たりしています。

そんな子どもにどう寄り添ったらいいのでしょうか。アドバイスしたり、指導することではありませんね。子どもを引っ張るのではなく、

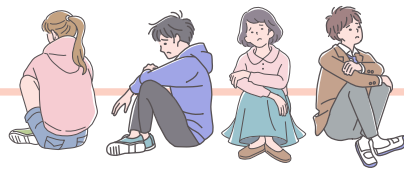
今の気持ちを理解して背中をちょっとだけ押すことだと思っています。子どもが主体的に生きられるように応援することだと思っています。なのでこの不成立の約6,000件の電話は、ひとりぼっちになりたくない、声にならない電話だと感じています。

行政でも、子どもの相談窓口をいろいろ用意してくれていますが、どう話したらいいのか子どもは相談の仕方がわかりません。チャイルドラインで、大人に自分の気持ちを話す練習をしてもらい、気持ちの整理をしてほしいと考えています。

これからも、行政と子どもをつなげる橋渡しの役割も担っていきたいと思います。

よこはまチャイルドライン副代表理事 野口由起子

子どもとともに



よこはまチャイルドライン活動概史

私たち「よこはまチャイルドライン」は、2002年に活動を始めました。日本では1997年にチャイルドラインの活動が開始されています。もともとは、イギリスで始まった活動が欧米でも拡がり、国際組織であるチャイルド・ヘルプライン・インターナショナルセンターが組織され、日本のチャイルドラインも参加しています。多様な歴史や文化のなかで活動も多様な方法が採用され、インターネットや対面での「相談」などを実施しているケースもあります。私自身は約20年前に北欧の組織を訪問するなかで、日本は夏休みあけなど、長期休暇後には着信が増える（現在その傾向はよこはまチャイルドラインではみることはありません）傾向があると話をしたことへの反応で長期休暇中だからこそ家族との軋轢、被虐待事例の着信が増えるというやり取りがあり印象的であったことを覚えています。活動は多様であれ、私たちの共通認識は「子どもとともにある」こと、子どもの権利保障を実現していく活動を担う「おとな」であることです。

よこはまチャイルドラインでは、2012年に週2回から3回（3回線）に開設回数を増やした電話に加えて、近年のコミュニケーション手段の進展によって、インターネットを媒体とした会話が子どもの間でも定着してきていることを受けて、よこはまチャイルドラインでも回数は限られていますが、チャット「相談」を実施しています。他にじっくりくる名称がないため「相談」を使用していますが、子どもの声を聴くことがもともとチャイルドラインの活動理念であり、電話による対応と同じくインターネットを媒介手段とするつながりでも「話を聴く」ことが基軸となっています。子どもの声を聴き、一緒に喜び、悲しみ、悩むことがチャイルドライン活動の出発点となっています。18歳未満の子どもであれば、匿名で「受け手」と会話することができます。

よこはまチャイルドラインの「受け手」は、活動を始める前に研修受講と、作文を提出する等の養成課程を経て、最終面接で意思確認がなされた方々を2年に1回受け入れています。これまで、1期から13期の「受け手」が活動に参加されています。個別ケースについて子どもとのやり取りや、考え方の整理の支援を行う役割を担うのが「支え手」になります。コミュニケーションに造詣が深い方、心理学や児童福祉学専門家が「支え手」を担っています。

子どもとのかかわり

子どもは、主体的に考え発信していく力と権利を有しています。2022年に成立した「こども基本法」は、子どもの意見表明を認め、実現することをその理念の一つとしています。

しかし、それを発信すること・尊重されることが必要という考え方は重要です。チャイルドラインもこの理念を大切にしてきました。子どもたちは自分の話を聴いてもらいたいのであって、相

手の経験談や「人生訓」を聴きたいとは思っていません。話を聴いてほしいのに、ほとんど話を聴いてもらえず、がっかりしたり、一方的に意見を押し付けられたり、叱責されるのであれば、二度とコンタクトをとろうとは思わないでしょう。子どもの気持ちを尊重しながら、必要があれば一緒に解決策を考えることが求められています。子どもと話すときに幅広い知識を持つことは望ましいことですが、「受け手」がわからないことがあるのもあたりまえのことです。

「人生訓」という言葉は2025年春のNHK朝の連続ドラマ「あんぱん」のオープニング曲「賜物」(RADWIMPS)の歌詞にも登場してきます。すてきな曲ですが、筆者は耳から入る情報だけでは歌詞全体を把握することは困難でした。それでもすてきな曲であるという感想は共有できます。「賜物」は、一つの説明事例ですが様々な分野でわれわれが知らないことや理解できないことはあります。その場合、子どもに正直にそれを伝え、教えてもらう姿勢をもちながら子どもとの会話はなされていきます。前記の歌詞については、NHKの公式ページによって全体を知ることができました。インターネットを通じて情報を得ることは、子どもたちにとっても、日常的な事象であり、場合によっては主要な手段となっています。しかし、なかには出典が信頼できないものや、意図的な誤情報(フェイクニュース)もあります。子どもたちが陥りやすい知識や情報の修正は必要なことです。

よこはまチャイルドラインが目指すこと

現代社会の中で子どもたちは様々な困難に直面し、多様な悩みを抱えています。私たちは、その課題に取り組む力を子どもたちが有していると考えています。ですから一方的なアドバイスはせず、子どもの話を聴き、共感しながら、ともに悩みを乗り越え、困りごとを解決する道筋を子どもたちが見出し、子どもが他者からの支援に繋がるよう手助けをしていきます。

子どもの悩みや、逸脱は子ども自身の「問題」に帰すことはできません。社会が生み出している矛盾が主要因であることも少なくありません。子どもたちの声を聴くことで判明してくる大人たちや社会の矛盾を解決するよう、個人情報の保護を前提に課題提起をしていくことも重要だと考えています。なによりも子どもたちのことを思い、電話やネットで一期一会であってもつながることに意義を感じている「受け手」を増やしていくこと、それが将来的には大人全体や社会に拡大定着し、子どもに優しい環境を整え、必要な権利擁護に加えて、子どもとともに地域社会を創り上げていくことをわれわれは目指しています。



よこはまチャイルドライン代表理事 松原康雄

ヤングケアラーを取り巻く社会情勢

よこはまチャイルドラインでは子どもの話に耳を傾ける受け手ボランティアを養成する講座を2年に1度開催しています。

今回は2024年に講師としてお招きした一般社団法人「Omoshiro」の勝呂ちひろさんに、ヤングケアラーを取り巻く社会情勢についてお話を伺いました。

まずは勝呂さんが一般社団法人「Omoshiro」を立ち上げたきっかけについて教えてください。

私たちは横浜市鶴見区で、うつ病など精神疾患のある方々のケアマネージャーとして福祉サービスの調整や医療連携といったケアプランを組み立て、支援者を巻き込んでいくことをしています。そんななか、ご自宅を訪問するとそこに小さなお子さんがいる世帯に出会います。私たちは精神疾患のあるお母さんたちに寄り添うケアプランを考えますが、そこで暮らしている子どもについては、この状況について誰と一緒に考えたり、暮らしの見通しを話してくれるんだろう、と思ったんです。そこに思い至ったのは、ある小学生の女の子との出会いがきっかけでした。その子の家ではお母さんがうつ病で、薬が合わず昼夜逆転の生活、部屋の掃除もままになりません。朝も起きられないことが続き、その子は荷物が床一面に溢れた状態から自分でマスクや教科書を探し、登校の準備をするといった状態でした。学校の先生たちも彼女が大変なことは気付いていても、本人が「困った」とは言っていないので、気にはかけてもなかなか踏み込めないという状況でした。そこで一般社団法人「Omoshiro」を立ち上げ、「うちの事業所では『親子まるっと併走』をします!」という形で宣言をしました。それ以降、精神疾患があり生きづらさを抱えた大人へのサポートと同時に、共に暮らす子どもたちの居場所作りや体験の機会の創出を一緒にやっていく、ということを二軸に運営しています。現在57件の家庭で、下は保育園から上は中学生まで約50人以上の子どもたちを支援しています。

「親子まるっと併走」の要望は、ヤングケアラー家庭と認識した行政、もしくは親御さんからの直接の要請などもありますか?

まず、現状では子どもたち自身に「自分がヤングケアラーである」ということの認識がありません。子ども家庭庁もその認知を上げていくというのを方針として出していますが、「自分はケアを担っている」ということを、子どもが誰かに発信できるようにならないとヤングケアラーの問題は可視化されない、という課題があります。そして親の側も、子どもをヤングケアラーにしている可能性があることに気づいていたとしても、申し訳なさや、それでも頼らないでいられない苦しさの中にありますので「この子はヤングケアラーです」と堂々と言える親はひとりもいないんです。そこで、私たちは“親も子ども生きづらさを抱え、必要としているケアがある”という形でケアのプロとして家庭に入りながら、子どもにもアプローチをかけます。

「今日学校どうだった?」と聞きながら「うちでこういう催しをやってるんだけど、来ない?」といった会話を通して、関係性を築いていきます。でも、そうするなかでお母さんとの関係性も変わるんです。普段の私とお母さんは、支援する側とされる側なんです。でもここに子どもが入ることによって、私たちは“この子の成長と一緒に楽しむ大人たち”になれるわけです。そこで、もう一歩近い距離感に変わっていくということば、親子をまるっと併走する良さでもあります。

親と子ども、大人と子ども、と関係性が多面的になるんですね

ケアマネージャーの基本的な支援というのは、ケアを必要としている方を中心としたプランであり、その方を取り巻く家族については、あくまで“ケアと一緒にやってくれる人なのかどうか”という視点になりがちなんです。そこには彼らがどんなふうに感じているのかという視点が入っていなかったんですね。私自身、ここが抜けていたと反省したところなんです。この関係性をきちんと考えることが、ヤングケアラーの話だけではなく、ケアをすることによって大事だと感じています。子どもは

お母さんをどんなふうに助けたいと思っているのか、お母さんは子どもにどんなふう to 成長してほしいと思っているのか、声かけしてもらいたいのか。その思いをそれぞれに語ってもらう。例えば、彼らにとっては「やりたくない」というのはお母さんを困らせてしまうから言いたくないし、誰かに頼るより自分でやった方が早いと思っているからサポートを提案するのも難しかったりします。そこで私も「世の中って保険とかお守りってあるじゃない?」って話をするとところから始めたり。「今ときはそういう生き方をしていけないと、もういよいよ詰むよね、だから保険かけようよ」という話をして「じゃあ足りないところは、ヘルパーさんに来てもらって、月2回ご飯を作ってもらおうか」という話に結びつけるわけです。そして繋がりのおかげで大切にしているもうひとつのポイントは、子どもたちに関しては「揺れ動いていい」を保証するんです。「今日はやりたくないけど、明日はやりたくない」気持ちを認めるんです。だって友達とサッカーの約束してきたじゃないですか。だから「やりたい」も「やりたくない」もちゃんと合わせてあげられる。この関係性を築けることがすごく大事ななと思っています。

正直に自分の気持ちを言える、その関係性が大事なんですね。

ヤングケアラーという状況の前に、まず「頼れる、相談できる」ことが子どもが生き抜く力だと思っています。頼ることがどうしても今は“弱さ”だとネガティブに考えられてしまう傾向がありますよね。劣っていたり、出来ないから助けてもらわなきゃいけないのではなく、頼るというのはあくまでも“繋がり”を作ることであって、誰かと繋がりが続けられるのはもう最高の力なわけですよ。この辺の話をちゃんと子どもたちとしていきたいなと思ってます

ヤングケアラーという状況下でのケアの話でもありますが、子どもが子どもらしくいていい時間を守るという子どもの権利の話でもあるし、すべての子どもに通じる話ですね。そんななかで、私たち大人ができることってなんだと思いますか。

その子たちの声を知ること、そこを想像して、やれることをみんなでシェアしていくことが大事なのだろうなと思っています。例えば、地域の中での顔が見える緩やかなつながりを大事にすること。お祭りに朝から晩までずっといる子がいるとしますよね。顔見知りの子だったら「今日は暑いね～」と声をかける。そうすると、その子は今ここにいることが認められるじゃないですか。そしてお互いが認識することで繋がれます。何か新しいことを始めるのはハードルも高いですし、1人で考えても出てこないの、今ある地域のお祭りや登校の見守り、学校のイベントなどが実はとても大事です。「じゃあ、お祭りのお菓子配り係ぐらいはやってみようかな」と気軽に気持ちで繋がってみるのがよいかもしれません。私たち大人も地域で暮らしているひとりとして、ここで私たちがらしくいる、ということをやっているとやっていくことが大事ですね。

勝呂ちひろ 一般社団法人 Omoshiro 代表理事 / 精神保健福祉士



一般社団法人「Omoshiro」を立ち上げ、精神疾患を抱えたお母さん・お父さん、そこで一緒に暮らすヤングケアラーの子どもたちへの「親子まるっと併走支援」に取り組む。全国の市町村における教育・福祉・子どもなどの関係団体に向けヤングケアラー実践支援に関する講演活動も行っている。

<https://omoshirosan.or.jp/>

はい、チャイルドラインです



「一期一会」

少しの沈黙のあと小さな声で「話してもいいですか？」
何度も言葉に詰まりながら自分の気持ちを伝えてくれました。
最後に「ありがとうございました」と言われると、私は涙がこぼれそうになるときがあります。
ほんの少しでも心が軽くなりましたか？ ほんの少しあたたかくなりましたか？ ほんの少し笑顔になれそうですか？ 魔法使いでもなく、知識も薄く、専門家でもなく、あなたの声に頷くことしか出来なくてごめんね。言葉足らずでうまく答えられずごめんね。

寄り添えなくてごめんね。そんな私に声を届けてくれて本当にありがとう。受話器を見つめながら想いが込みあげてきます。鳴りやまぬ電話に少しでも深呼吸をして「はい、チャイルドラインです」。夜空の先で私と繋がるあなたの声に耳を傾けます。心を寄せます。うまく話せなくても、沈黙が続いても、ため息だけでも、そこにある感情を受け止めます。

電話をかけてくれる皆さんへ、いつもありがとう。



電話利用状況

2024年4月
～2025年3月



主訴	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
学校 フリースクール	40	55	51	47	38	53	82	52	56	58	48	56	636
部活	7	1	4	6	2	5	3	8	5	6	3	1	51
性	39	51	39	41	65	50	59	49	51	51	58	49	602
家庭	23	19	16	28	28	30	38	18	22	31	17	29	299
職場	0	0	1	0	0	2	1	0	0	0	2	1	7
ネット トラブル	2	0	3	0	1	4	2	2	0	1	1	4	20
地域	5	2	1	2	2	1	7	1	10	0	10	1	42
自分	78	72	70	70	85	85	111	104	107	93	82	89	1,046
不明	394	370	376	547	589	516	737	571	598	592	448	427	6,165
累計	588	570	561	741	810	746	1,040	805	849	832	669	657	8,868
会話成立率	33%	35%	40%	26%	27%	31%	29%	29%	30%	29%	33%	35%	31%
成立件数	194	200	185	194	221	230	303	234	251	240	221	230	2,703

ご支援のお願い

よこはまチャイルドラインは、
みなさまの寄付によって 支えられている NPO 法人です。
活動を支援していただく サポーターを広く募っております。
どうぞみなさまご協力をよろしくお願いいたします。

●正会員・賛助会員になる・・・・・・・・

年会費(個人) 4,000円 /1口

年会費(法人) 10,000円 /1口

口座番号: 00270-6-13812

口座名義: NPO法人よこはまチャイルドライン

※郵便振替(払込票をご利用ください)

●1回のみのご寄付も受け付けております・・・・・・・・

口座番号: 00270-6-13812

口座名義: NPO法人よこはまチャイルドライン

ご支援ありがとうございます

2024年8月～2025年3月までの寄付総額

2,467,368円

編集後記

2024年度は新たにオンラインチャットも始まり、その件数についてもご報告させていただきました。近年コミュニケーションのあり方も多様化していますが、新たなツールが子どもたちにとって味方になれば…と願います。「Harmony」へのご感想・ご意見などありましたら、ぜひHPよりお寄せください(小山)